

源氏物語を訳して

——文体の問題——

E・G・サイデンステッカー

谷崎潤一郎は「源氏物語」を三回訳したが、私は再度訳すかどうかおぼつかない。私自身、谷崎を羨んでいるともいないとも言いかねる。谷崎のように何回訳しても売れるというのは良いことであろうが、一方で古い訳の不備を乗り越えようとする新しい訳がその都度いくらかでも売れることを思うと、不安にさらされるに違いない。

無論、誤りを訂すのはよいことであろう。私の『源氏』誤謬リストも増えに増えている。それは増え続けるに違いないし、私の全く気づかぬ誤りもあるに違いない。

しかしながら、もっと根本的な問題で、私が考え続け、かつ何とか解決できたらと思っているものがある。それは文体に、そしてまた訳者の批評家としての働きに、関することである。訳者が、翻訳とは原作から写し得る点を全て写すものだという論に立つならば、彼は原作の本質的な諸点が何々であるかについて十分理解しているべきである。彼は批評家となり、その訳は批評の実践となるからである。

私は英訳『源氏』の解説に、次のように述べておいた。「重要な点のすべてに関して、リズムの点を含めて、原作

を写すのが翻訳のねらいであるとするならば、ここに出す訳は、それらのねらいを、ウェイリーの訳よりもよく叶えていると言ってよいであろう。」

「リズム」の語は最も普通の意味で用いるなら、ことばの起伏、文の長さ、そして一節を音読もしくは黙読するのに要する時間の長さ、のことである。そこで私は、私の訳がこの意味で原作を写すことに成功しているか否かを問うてみた。

その判定はきわめて簡単である。原作の一節を読む方が私の訳の一節を読むよりも多くの時間がかかるのである。これは、日本語が私にとって外国語であつて英語が私の母国語であるということとは無関係である。日本人が原作の大半の部分を読んだとしても、英米人が「私の」訳の大半の部分を読むよりも多くの時間がかかることは確かだと、私は考える。

主たる要件が原作のリズムをこの語の音楽的な意味で写すことにあるならば、明らかに必要なのは、訳文のペースを落とすというようなことである。ウェイリー訳は私の訳よりはテンポが遅く、思い切った削除〔訳者注、「鈴虫」の全文や「藤袴」「幻」の主要部分などを省いていることを指す〕をしているにも拘らず、私の訳よりは多くの語数を費している。もしこれが原作を写すための一つの工夫であつた——私にはそうであつたとの確信はないが——ならば、よい工夫であつたと言つてよいであろう。確かにウェイリー訳の一節を読むのに要する時間は、私の訳を読む時間よりも、原作を読むのに要する時間の方に近いようである。

リズムに関してはもう一つの問題があり、私にはその方がむしろかしいと思われる。活用語の重なりが多さに従つて原作のテンポが遅くも遅くもなるといふ事実である。ウェイリー訳は、テンポが遅い故に、惣じて私の訳よりは原作のリズムに近いであろう。けれども、ウェイリーがこうした微妙なリズムを写そうとしたとは思われない。形容詞や

動詞の重なりに応じて緩急するテンポを移してはいないからである。

事はあるいは不可能かもしれない。英語の活用語の変化形は平安時代の日本語のそれに比して遙かに簡単であり、かつ英語が膠着語ではないからである。「日本語では」動詞の形の変化は必要な表現内容の変化を表しており、他の動詞がついて意味を修飾することは、あまりない。しかしながら、リズムが最も重要なものであつて、訳においてもそれを写さなければならぬとするならば、恐らく修飾語を加えて処理しなければならないであらう。もとの動詞の意味を修飾するためにもう一つの動詞を加えることができるはず、種々な連用修飾語なら加え得る、ということもあらう。その結果は恐らく、私の見るところウェイリー訳がそうであるように、気取り改まった文体となつて、たとえリズムを保持しようとしても、そうした点で原作から離れてしまうということになるであらう。

リズム以外の諸点もリズムと同様に重要だとするならば、われわれはここに解決不能な問題の一例を抱えていると言えよう。一つの難問に対する解決と思われるものが他の難問をむずかしくしているに過ぎない、という問題である。もう一つ、調子あるいは声調ヴォイスに関する問題がある。より明確に言えば、原作のわれわれに語りかける調子が日常語の調子や文体と見られるか否かの問題である。原作のことばは口語であらうか、それとも文章語ないし改まったものであらうか。もし前者であるならば、そしてもし訳者が原作のリズムを写そうとしながら「訳文を」改まった文章語にしなければならぬとしたならば、彼は明らかにディレンマに出会うことになる。どちらを採っても満足が行かないからである。

このディレンマは、きわめて手の込んで格式ばつたことばが甚だ口語的でもあり得るという事実と関係する。格式が普通の会話の要素をなしている場合には、口語的ということと格式ばつているということは、同一になる。訳文のテンポを落してリズムを原作のそれにあらかた似せるという方法もあらうが、その場合は恐らく口語的である度合

が弱くなるであろう。もし私がもう一度「源氏」を翻訳するとしたら、解説からリズムに関する論を削除するか、あるいは「私の」新訳とウェイリー訳との相違を際立たせるのにもっと適切な方法を見出し、むしろ口語口調の問題にしばらくであろう、と思う。

「源氏」が大部分の非専門家に読みにくいことは言うまでもなく、この作品が口語体で書かれているという見解も、直ちに大方の賛同を得られるとは思われない。訳文を現代の口語「英語」にするよりも古風なものにした方がよかったのではないかとたびたび言われたのも、恐らくこの故であろう。シッフェル教授の仏訳は甚だ好評のようであるが、前近代的フランス語である。

現代日本語への訳の場合には、その名からして、当然この問題は解決済みの筈である。現代語への訳と謳っており、古風なことばに訳すことが適当か否かという疑問は、理論上全く起り得ない筈だからである。

谷崎はその第二訳の解説で、最初の訳が講義あるいは翻訳調に過ぎたことを認め、今回の訳では「実際に口でしゃべる言葉に近づけること」を行なったと述べている。注意すべきは、谷崎の三訳を通じて、完全な口語にはなっていないことである。しかしながら更に問題なのは、現代日本語で口語体と称されるものが一つの人造語であつて、「実際にしゃべる」言語と同一ではない、ということである。従つて、現代日本語に訳そうとしても、厄介な問題が残るのである。さまざまな種類の現代日本語の中で、原作に最もよく近似し得るのはどれか。この問題は主として動詞の形に関する。次に引くのは、「行幸」の一節である。

西のたいのひめ君も、たち出で給へり。そこばく挑みつくしたまへる人の、御かたち、有様をみ給ふに、御かどの、赤色の御衣たてまつりて、うるはしう、動きなき御かたはら目に、なすらひ聞ゆべき人なし。わが父おとゞを、人知れず、目をつけたてまつり給へど、きら／＼しう物清げに、さかりにはものし給へど、かぎりありかし。

いと、人にすぐれたるたゞ人とみえて、御輿のうちより外に、目移るべくもあらず。まして「かたちありや」「をかしや」など、若き御達の、消えかへり心うつす、中・少将、なにくれの殿上人やうの人は、なにゝもあらず消えわたれるは、さらに、たくひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔ざまは、異物とも見え給はぬを、思ひなしの、いま少し、いつくしう、かたじけなく、めでたきなり。さば、かゝるたぐひは、おはしがたかりけり。

底本は日本古典文学大系本。この巻の名の由来となった行幸の描写の一節であることは分つて頂けるであろう。この一節を選んだのは、格式もあつて口語的でもあることばにふさわしい調子をいかにして出すかという、基本的な問題の例になるからである。この場面には一人の帝と二人の大臣とが居る。従つてこの一節はことばの莊重さが叙述のペースを落すこともあることの好例であるが、現代日本語に訳した人々の抛つた慣用から、この一節は甚だ口語的なものと分る。谷崎の初訳は次の通りである。

西の対の姫君も今日はお立ち出でになつたが、いづれも劣らじと張り合うて着飾っていらつしやる方々の、お顔だちやおん有様を御覧になるのに、畏くもお上が赤色の御衣をお召し遊ばして、龍顔もうるはしう威儀を正しておいでになるのには、擬へられるものがあるべくもない。御自分の父上の、内大臣に人知れずおん眼をおとめになると、いかさまきらびやかに、お綺麗なお姿をしていらして、男盛りのお年頃ではいらつしやるけれど、矢張御身分には限りがあつて、せいぜいお立派な尋常人と見え給ふだけであるので、結局貴いお輿のうちをお拝み申し上げるより外に、お目移りも遊ばされない。まして容貌がすぐれてあるとか美しいとか持て囃して、若い女房達が現を抜かしてゐる中少将や、誰とか彼とかの殿上人と云つたやうな人は、全く物の数でもなく、消えてしまつたやうに眼につかない。

ここでは、当面の目的からはそれが、細かい点で一つの不幸な事実が注意される。右の一筋に光源氏の名や光源氏と帝〔冷泉院〕との似ていることが見えないことである。明らかに検閲制度の故である。皇室尊敬の念から谷崎は物語の核心に近い一連の事件すなわち光源氏と藤壺との情事とその結果としての冷泉院の誕生とを省かざるを得なかったものであり、従って光源氏と帝とがよく似ているというような読者の好奇心を引くことは、一切省かねばならなかったのである。これは確かに興味ある問題であるが、もっと重要な文体の問題とは関係がない。

この場面の莊重な性格は、述語形によって出されているが、述語形というものは、言うまでもなく翻訳の文体を決める最も重要な要素である。〔右の〕訳で直ちに気づくのは、くだけた、実のところむしろ略式な〔無敬語〕の述語の存在である。「なった」「あるべくもない」「あそばされない」「目につかない」などは原文のどの部分よりも略式である。しかしながら、それらが訳を原文よりもくだけて口語的なものにしていないということはない。それらは、文体を現代のいわゆる「口語体」に近くするために導入されたものであった。

話し言葉と書き言葉との一致を試みてきた現代の文章語では、いくつかの人工的な述語形が慣用的になっているが、実際にはそれらは二つの文体〔話し言葉と書き言葉〕を別のものとする機能を果してきており、現代の読者はそれに全く慣れてしまつて、急にそれを用いない文体に出会つたら、不快感をなくすまでには〔相当の〕時間と努力が要るであらう。

谷崎がその第二訳の解説において彼の最初の訳の文体を釈明した折に言っているのが、果してこの通りのことかどうかはともかくとしても、恐らく彼は、読者に不慣れなものを与えない方が安全だと思つたのであらう。原作にはこうした現代の慣用表現に当るものは無い。それら〔慣用表現〕が多くの現代文章語に有している効果は、口語体の書き言葉と実際に口でしゃべることとの間に一定の距離が保たれているということである。

改訳して行く過程で、谷崎はこうした人工的な表現を捨てた。次に第三訳から同じ部分を挙げる。

西の対の姫君も今日はお立ち出でになりました。いずれも劣らじと張り合つて精一杯着飾つていらつしやいます方々のお顔だちやおん有様を御覧になりますと、お上が赤色の御衣を召して、威儀を正して身じろぎもなさらずにおいでになるおん横顔に、擬えられる人はありません。御自分の父上の内大臣に人知れず眼をおとめになりますと、いかさまざらびやかに、お綺麗な姿をしていらしつて、男盛のお年頃ではいらつしやいますが、御身分には限りのあることです。せいぜい諸人に立ち勝つた尋常人と見えますだけで、鳳輦のうちをお拝み申し上げましては、ほかに眼移りすべくありません。まして容貌がすぐれているとか美しいとか持て囃して、若い女房たちが現を抜かしている中少将や、誰とか彼とかの殿上人といったような人は、ものの数でもなく消えてしまつて眼につきませんのは、全く帝が類もなくていらつしやるからなのでした。源氏の大臣のお顔たちは、そっくりでいらつしやいますけれども、思いなしか帝は今少し威厳があつて、もつたいたなく、お立派なのです。さればこのようなおん方に似たお人は、めつたに世の中にいるわけはないのでした。

最初の訳で省かれていた部分が復活しているのは、無論厄介な検閲制度が消滅したからであるが、それより遙かに重要なのは、述語形の変化である。現代口語体の慣用表現は消えた。書き言葉としてはより慣用的でないものとなり、より口語的なものとなっている。

この新訳の最初の一文は尊敬の動詞で、二番目の文は、とり立てて尊敬の動詞ではないにしても、丁寧語で終っており、これが一貫した型である。各文末の述語は、話し言葉の末尾にきわめて普通に聞くものであるが、小説の文末としては引用文〔直接話法〕以外には見えないものになっている。

谷崎は、最初の訳には敬語が多すぎると考えて、その数を減らした。敬語動詞の正確な数は第二・第三訳で減って

いるかもしれないが、前引の一節から見ると、文末の敬語は増えているように思われる。「遊ばされない」の例は特に興味深い。きわめて格式ばった動詞が略式「無敬語」でくだけた終り方をしている奇妙な形である。これは第三訳では、「すべくありません」という、元来改まって格式ばった点の少い動詞「ある」に丁寧な文末をつけた形に変えられている。本来の敬語動詞の数は減らされたかも知れないが、文末を丁寧表現で終る傾向は強まっているのである。この意味では、第三訳は、現代小説の標準語法に比して、往来で耳にしたり実際の会話の筆録に見たりするような口語語法に近い。

「では」谷崎の第三訳は、その口語的性格の故に他の訳より読みやすいであろうか。私にはそうは見えず、この点で私が孤立しているとも思われない。無論「平均読者」とか「一般読者」とかいう一般論に持つて行くのは早計であろうが。多くの人々に訊ねてみた結果、この訳は広く読まれている現代語訳の中で一番読みにくいというのが、皆に共通した答であった。谷崎は第一訳の解説において、原作にある「色気」のやうなものを出すために「間接な、むき出しでなく、幾様の意味にも取れるやうな含みのある言ひ方」を残そうとした、と述べている。第二訳以後でも同じ意図を有していたか否かは明らかでないし、どちらにしてもそれが読みにくさの主な原因になっているとは、私には思われない。むしろそれと関係するのは、述語形が現代口語の書きことばに見慣れぬ形となっていることである。その読みにくさは、仮名だけで書かれた文に出会って当初感ずるものに近い。慣れていないのであって、慣れねばならぬのである。

他の現代語訳の中では、与謝野晶子訳と円地文子訳が最も広く読まれている、与謝野訳の同じ一節を次に挙げる。

六条院の玉鬘の姫君も見物に出ていた。きれいな身なりをして化粧をした朝臣たちをたくさん見たが、緋の上着を召した端麗な鳳輦の中の御姿になぞえることのできるやうな人はだれもない、玉鬘は人知れず父の大臣に

注意を払ったが、噂どおりにはなやかな貫禄のある盛りの男とは見えたが、それも絶対なりつばさとはいえるものでなくて、だれよりも優秀な人臣と見えるだけである。きれいであるとか、美男だとかいって、若い女房たちが陰で大騒ぎをしている中将や少将・殿上役人のだれかれなどはまして目にも立たず無視せざるをえないのである、帝は源氏の大臣にそっくりなお顔であるが、思いなしか一段崇高な御美貌と拝されるのであった。でこれを人間世界の最もすぐれた美と申さねばならないのである。

直ちに気づくように、ここには敬語がほとんどなく、初めから谷崎のどの訳よりも読みやすい。しかしながら、述語形の略式さ（「無敬語」という点で、この与謝野訳は谷崎訳のどれよりも原作から遠いと言わねばなるまい。また、谷崎訳よりも非口語的であるとも言わねばならない。敬語の省略から出て来るのは、次の二点である。一つは訳文が歯切れよくなめらかになり、現代口語の書きのことは慣用表現に近づいたこと、もう一つは、特に文末を「だ」「である」とする文体を導入したことで、これは実際の話し言葉では減多に耳にしないものである。原作には、こうした慣用表現に正確に対応するような表現は無い。

次に引くのは、円地氏訳の同じ一節である。

西の対の姫君もお出かけになった。今日を晴れと、どなたも装っておいになる御様子を御覧になったものの、帝が赤色の御衣を召されて、端麗に身じろぎもなさらない御横顔には、お準え申せる人もない。姫君は実の父君の内大臣のお姿に人知れず眼をつけておいでになると、まことに美々しく男盛りでいらっしゃるが、やはり御身分に限りがあつて、容儀の誰よりもすぐれた人臣というだけのことで、御輿の中の帝のお顔よりほかに目を移すべくもない。まして容貌が美しいとか、趣があるとかいって若い女房たちが死ぬばかりに恋いこがれている中将・少将などという方々、誰彼の殿上人などは、ものの数でもなく目にも映らないのは、まったく主上の類い

稀なお美しさのためであった。源氏の大臣のお顔立ちは、主上と瓜二つでいらっしやるのに、思いなしか、帝はもう少し厳かにお見えになり、勿体ないほど御立派である。してみると、このように優れた御方はまたとおありにならないのであったか。

調子の違いが著しい。与謝野訳の文体はほとんど敬語を有さぬ略式なものであったが、この円地訳は、敬語は有しながら現代口語体の慣用表現に従っている。谷崎の第一訳に基だ近いのである。敬語の動詞はあるが、文末には見られない。「なった」「ない」「あった」「ある」「あったか」と、文末は与謝野晶子訳の大部分の述語と同様、略式でくだけたものとなっている。それらは、くだけてはいるが、敬語と略式なことば（「非敬語」との取合せが実際の話し言葉ではほとんど耳にしないようなものになっているため、一種改まった感じを出している。例えば最初の文末は、本当にくだけた口語に訳せば、「お出かけになった」よりも「お出かけになりました」となるであろう。谷崎の最初の訳に見るように、口語的であるかのような感じで読めて実は文章語の慣用に乗っている文体というものが存するのであるが、そうした慣用表現を肯定する根拠は、原作にはない。

常々私の感ずるところでは、与謝野訳が一番読みやすい。これは、同訳の文体が一番よいということではなく、むしろテンポが早くて、全体に不明瞭な表現がないからである。谷崎の第三訳が読みにくいと言う人は、与謝野訳が読みやすいという私の意見に同感してくれている。「文章の」テンポを落してしまう敬語がないということは、現代小説の文体に近いということでもあって、特に重要である。それは自然の口語ではないが、文章語の慣用表現を有し、人工的に近似した口語にはなっている。

以上はどれも、主要な作家達が文学として読まれることを望んで行なった文学的翻訳である。敬語や活用語の扱い

において、学者達の訳は全体に谷崎の第一訳や円地訳に近い。いずれにしても、私がこれまで一番参考にしてきた玉上琢弥教授の『源氏物語評釈』や阿部秋生・秋山虔・今井源衛三教授の小学館日本古典文学全集版では、与謝野晶子訳よりも遙かに多くの敬語が用いられているけれども、文の末尾に置かれた動詞は、現代口語体の慣用表現に従っており、しばしば実際の話し言葉ではほとんど耳にしない表現となっている。つまり、学者達は文学的效果〔末尾訳者注参照〕には無関心と言ってもよさそうなのに、文章語の慣用表現には従っているのである。

七種の訳の中で、活用語の扱いでは谷崎の第三訳が最も原作に近いと言えよう。各活用語が原作のそれによく対応しており、また谷崎は現代口語体に広く許容されてきた慣用表現を意識的に避けたようである。けれども一般にはその訳を読みにくいと感じているようであり、私自身もそう感じている。その読みにくさは、主として現代文章語の慣用に従っていない点と関係している。それは読者が口語の叙述に予想しない点であって、それ故に読者は、少くとも当初は、とまどうのである。

谷崎の第三訳が他の訳よりも読みにくいのは、それらよりも口語的でないからではなくて、より口語的だからである。語り手の声調がすぐ目の前にいるかのように聞え、日常会話と同じく登場人物の尊敬すべき度合に応じて敬語を使い分けているのであって、それはまさに紫式部の語り口である。原作の声調は、われわれに目を通してよりも耳を通して語りかける性質のものであり、作者が実際に聞き手の前にいるような話し方のものである。

訳文をどの程度口語的にするかという問題は、現代日本語への訳と謳った場合には、理論上消失すべきである。谷崎の第三訳が読者に親しめない理由は原作の口語的性格を忠実に写しすぎたためだ、というのが本当だとすれば、現代日本語への訳者は一つのディレンマに陥ることになる。現代文章語の慣用を尊重して読者が最も親しんでいる文章語を用いるか、原作のきわめて口語的な性格を写そうとして非慣用的ななじみ薄い文体を用い、読者に嫌われる危険

を冒すか、である。訳者達の中で、谷崎だけはその危険を冒したのであった。

英語への訳者は、二重のディレンマに出会う。原作のリズムを写そうとして原作の手の込んだ活用語（「の重なり」）が要するのと同じ時間を訳文に充てるならば、恐らく極度に気取って飾った、原作の口語的性格からは程遠い文体にしなければならぬであろう。またリズムは早めねばならぬとしても口語的性格は写そうとすれば、第二のディレンマに出会う。口語的でもあり自然でもある文体をいかにして見出すかという、谷崎が出会ったのと同様なディレンマである。

この場合の大きな難問は、完全に口語的にしてしまうことは不可能だということである。英語への訳者には、「現代」日本語への訳者が出会わない一つの難問がある。英語としてどちらも勢力あるイギリス英語とアメリカ英語、その両方の読者に氣に入って貰いたいという望みである。そのためには、一層改まった慣用的な語法をとらねばならなくなる。純粹に口語的な言い方をすればたちまちイギリス英語か米語かがはつきりしてしまい、訳文は、もしそれが米語的に過ぎればイギリス人に嫌われるに違いないし、もしイギリス的に過ぎればアメリカ人に嫌われるからである。

訳者が原作の最も重要な諸点を写すことをもって責務と考え、かつその一つの点を写せば他の点を失うことになるというのであれば、何が最も重要な点かを一つ定めてそれを写そうとしなければならぬ。もし私が「源氏物語」をもう一度を翻訳するとしたら、一番ウェイトを置くのは口語口調であろう。大きな難問は谷崎が第三訳で出会ったもの、つまり「原作の」調子を写そうと努めれば広く許容されてきた文章語の文体から離れて読者に不快感を与えかねない、ということである。完全な口語体にするということは困難、あるいは不可能かも知れない。

英訳を「シッフフェルの」仏訳のように意識して文語体で行うべきであるという意見は、従って不適当ということに

なる。私の訳で一番まずい点は、私が原作の調子を忠実に追うつもりであったとすれば、すでに文語的に過ぎるという点だからである。

訳者注 右に見るように、原文は甚だ論旨明快な上、きわめて歯切れのよい文体で、短文が接続詞なしに畳みかけられた部分も多いが、そのまま訳してはやや落着きの悪いところや分りにくいところもあるので、訳者の考えで接続詞や最低必要な説明などを角括弧に入れて補ったり文を続けたりした点もある。訳者の技術で文体のニュアンスと論旨の分りやすさを両立させ得ない場合には、学術論文であることを考慮して後者を採ったのである。

なお、原文には、文体・語法などに関するいくつかの術語テクニカル・タームないしキー・ワードが繰返し現れるので、念のためにそれらを次に挙げ、それぞれに与えた訳語と対比しておく。中に一、二、コメントを要するものもあるからである。

先ず、翻訳の本質や実態を述べる折に毎度「写す」と訳した原語は *imitate/imitation* である。「模倣（する）」
と言いたい読者は、そう言いかえられたい。

「文体」「調子」「声調」は、それぞれ *style, tone, voice* の訳である。但し *tone* は、*colloquial tone* などでは「口語口調」と訳した。

従って、「口語」あるいは「口語的」というのは *colloquial* の訳であり、基本的に話し言葉の意であって、古語に対する現代語の意ではない。これに対する「文章語（的）」は、原文には *literary* とあり、例えば頻出する *literary conventions*（いわゆる常体の文末、「だ」「である」などを指す）は、「文章語の慣用表現」と訳しておいたが、ただ一箇所（一一頁）*literary effect* は、「文章語としての効果」というニュアンスを含みつつ一応は「文学的效果」の意味であると考えられる。因みに、この *conventions* は *conventional forms* の意と見られるので、「慣用表現」

としたのである。これらに対して、古語に対する現代語のことは、modern Japanese とある。これらを複合した言い方は、例えば modern colloquial writing を「現代口語の書きことば」（九頁）のごとく訳しておいた。

筆者が語法を問題にしている「活用語」と「述語形」は、それぞれ conjugated forms および verb forms/verbs の訳である。一見疑問に思われる向きもあるかも知れないが、前後関係と論旨とを照合されれば納得の行くことと思う。そしてそれらの形と文体との関係で用いられた評価語では、formal を「改まった」、informal を「くだけた」、ceremonial, mannered をそれぞれ「格式ばった」「気どった」と訳した。elaborate は原則として「手の込んだ」としたが、これは敬語などの補助動詞・助動詞類がいくつも重なる語法を指すと見られる。逆に、formal の反対語でしばしば informal と重ねて用いられている abrupt は、「一応「略式な」で訳し通したが、具体的には、何箇所かに注したように、敬語を用いていないことを指している。それと近い意味で familiar の語も、「二回見られるが、この方はキーワード的に特定された意味とは見られないので、「くだけた」（六頁）」「なじみ深い」（unfamiliar が一頁に）など、適宜に処理しておいた。

その他、「書き言葉」「話し言葉」がそれぞれ written language, spoken language 「敬語」時には「尊敬語」が honorific (word) の訳であることなどは言うまでもなく、こうした一語一語を英語から日本語に置きかえるのはたやすいが、論旨を正確に伝えるだけでなく筆者の呼吸や気魄までも字句に出すのは、経験の浅い訳者には容易でない。この訳文が又しても翻訳のむずかしさを証する一例となるに過ぎないことを惧れる。

(一九七九・一〇・一七 福田秀二)